2017 年 12 月 21 日（木）

みんなで語る子どものための本の時間

読むの木講座

子どもの本から子どもの未来や夢を一緒に考える時間です。テーマは本を通じて感じる日本と世界の子どもの環境、文化、風土、教育とさまざまです。参加者のみなさんには、知識を共有するだけでなく、子どもたちの未来へのビジョンも語りあっていただき、子どもの本を軸にした交流が広がることを願ってマイティブックの代表松井紀美子が 2011 年から不定期で開催しています。

【開催報告レポート：2017 年 11 月 21 日：No.7】

子どもの本の作家がバンコクで考えた
アジアの子ども達が夢中になれる本

2017 年 5 月にタイ・バンコクを訪れ、国際アンデルセン賞を主宰する国際児童図書評議会（IBBY）の子どもの本の国際会議「第 3 回 IBBY アジア・オセアニア地域大会」への参加や国際交流基金バンコクで講演を行った、メルボルン在住の作家で翻訳家の渡辺鉄太さん、坪田譲治賞作家の濱野京子さん、絵本作家で歌人の陣崎草子さん。この 3 名のバンコク体験を語るイベントを、東京都渋谷区ヒカリエで開催しました。コーディネーターはバンコク訪問の旗振り役のまついきみこで、参加者は主催側を含め 37 名でした。

一緒にタイに行ったまはら三桃さんは、都合で参加できなかったが当日電話で HAPPY CALL をいただいた。

<開催概要>

2017 年 11 月 21 日（火）
時間：19：00～20：30
参加費：1000 円
場所：東京都渋谷 ヒカリエ　カンファレンスルーム C
主催：マイティブック　協力：日本国際児童図書評議会（JBBY）

<パネリスト>

渡辺鉄太（わたなべ てつた）●絵本作家・翻訳家・メルボルンこども文庫主催
濱野京子（はまの きょうこ）●児童文学作家
陣崎草子（じんさき そうこ）●絵本作家、児童文学作家、歌人

<コーディネーター>

まつい きみこ●子どもの本のジャーナリスト・絵本の出版社マイティブック代表

<当日のプログラム>

プログラム

バンコクで訪れた子どもの本の関係各所のスケジュールが右です。
今回このツアーで、私たちが体験したこと、思ったことを通じて、アジアの子どもの本に必要なことを語ります。

日程			濱野さん	まはらさん	陣崎さん	松井	鉄太さん
5月8日	月	AM	成田空港集合！AM8:50 【成田10:50 → バンコク15:20 TG641】				
		PM	AROMAホテルへ				
		NIGHT	国際交流基金バンコクにて、打ち合わせ				夜到着
5月9日	火	AM	第3回IBBYアジアオセアニア地域大会開会式 AM 9:00～				
		PM					
		NIGHT	国際交流基金バンコク図書館 トークセッション「児童文学作家の仕事」19:00～21:00				
5月10日	水	AM	第3回IBBYアジアオセアニア地域大会分科会が始まる				
		PM					15:30～16:00 IBBY講演
		NIGHT	第3回IBBYアジアオセアニア地域大会 19:00～21:00 カルチャーナイト（TKPARK）				
5月11日	木	AM	タイの教育支援団体マレットファン訪問				
		PM				14:15～14:45 IBBY講演	
		NIGHT	第3回IBBYアジアオセアニア地域大会 日本人参加者みんなで晩餐会				
5月12日	金	AM	お寺の幼稚園訪問"Wat Thatthong Kindergarten"				IBBY図書館訪問
		PM	pianissimo press メイさんとのコラボ作品作りワークショップ				書店巡り
		NIGHT	タイ在住コーディネーター長尾さんと高級住宅街のタイレストラン				
5月13日	土	AM	水上マーケット・ローズガーデン観光				
		PM					
		NIGHT	帰国		アジアティーク ザ リバーフロント ナイトマーケット		
5月14日	日	AM			帰国	サロン・デ・オデュタント 講演会	
		PM					
		NIGHT					
5月15日	月	AM				ラオスへ	オーストラリアへ帰国
						5月19日帰国	

<パート1>

国際交流基金バンコクからの様子 陣崎草子さん

IBBY世界大会＆アジア大会を通じて 渡辺鉄太さん

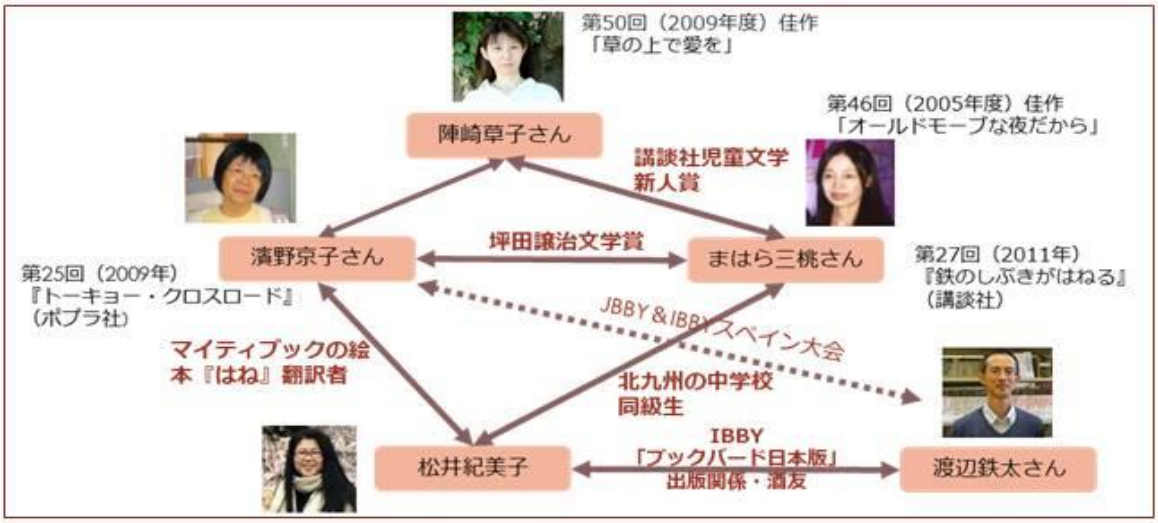
タイの作家、幼稚園、マレットファン、TKPARK図書館 **現地で感じたこと** 濱野京子さん

<パート2>

アジアの子どもたちに必要な本

体験を通じて、これからの子どもの本作りを考える

【参考】なんとなくつながっているところに運命を感じました。



後日、お申し込みいただいたメールに今回のイベントについてのアンケートをお送りします。ご協力を、何卒お願い申し上げます。

＜パート１＞

１）陣崎草子さんを中心に、国際交流基金の様子やタイの人々の反応を語っていただきました。

子ども本への興味関心の高さに驚いた、国際交流基金バンコク

「子どもの本の話という呼びかけに、タイの人がこんなに集まってくれるとは思いませんでした」と、国際交流基金バンコクの講演会に 70 名近い人々が集い、熱心に自分たちの話に耳を傾けてくれたことに陣崎さんは驚いたという。

国際交流基金のイベントでは、他にも参加した濱野京子さん、まはら三桃さん、渡辺鉄太さんの児童文学作品も紹介したが、陣崎草子さんの絵本『おむかえワニさん』（文溪堂/2013 年）に来場者やメディアの多くが関心を寄せていた。それについて陣崎さんは「絵を見て内容が分かったからではないか？」という言葉の壁が低いことが、その要因ではないかと状況を振り返った。

濱野さんは、その内容が分かるという点について、「児童文学は、読まなければ中身が分からないので、言葉の問題は大きいですよね」と陣崎さんの感想に共感しながら、翻訳（言語の仕組み：主語述語の関係など）や現地の習慣（表現：「そういう言い方はしない」「そういうものがない」）など、「物語の中身の伝え方が、異文化間でぴったり合わないなあ…」と日本の児童文学を海外で紹介するハードルの高さを、バンコクのイベントや他施設の訪問を通じて感じていたそうだ。

陣崎さんは国際交流基金バンコクでの会場で、絵本『おむかえワニさん』の「妖怪」的なシーンが描かれている場面をスライドで見せ、参加者の皆さんに「全く初めて見る異質なものですか？もしくは、親しみを感じるどこかで見たような絵ですか？」と質問したところ、7 割くらいが「どこかで見た、親しみのある絵」と回答。『おむかえワニさん』にタイの人がアジア的な文化圏のつながりを感じてくれたことも発見だったそうだ。そして、タイの絵本には、まだこんな子どもの想像力を育むようなものが少ないことも知ったという。

陣崎さんは、「タイでは、これまで絵本は教育的概念が強く、子どものしつけに用入られることが多かったと聞きます。先日、東京子ども図書館（※１）で行われた、タイの教育 NGO のマレットファンの講演会に参加しました。お話にあった『絵本は、これをしては地獄に落ちる、こんな悪い子は罰を受ける。といったものばかり読み聞かされて、絵本はずっと恐ろしい本だと思っていた』という話を聞きました。タイでは宗教的に仏教思想なので、本もこれまでそういった仏教思想的なお説教をするためのものが多かったことも、子どもが本を見て楽しそうだと思わなかった要因かもしれません。今も、もしかしたらそういう本のほうが多いのかもしれませんが、そんな教育的な絵本から、作家が自由な表現を追求し、子どもが純粋に読書の楽しさを味わえるという絵本のニーズが高まっているのだと、国際交流基金バンコクの皆さんとの交流や IBBY アジア大会の会場で展示されている様々な本を見て思いました。子どもの本に限らずアートやデザインなど表現全般の隆盛期がタイに訪れつつあると実感しました。私が見つけたこの 2 点の絵本も、もし日本で出版されていても前衛的に映るのではないかと思われるような絵本でした」と、タイの子どもの本の変化をタイの訪問と帰国後の体験を重ね合わせ、絵本の新しい流れに関心を持っているタイの人々の様子を掘り下げていった。

さらに陣崎さんは、翻訳の問題が児童文学のボーダーレス化のハードルのひとつという点にも触れた。「これからテクノロジーの進化で、翻訳アプリなどがもっと高性能化してきます。そうなると、国籍や言語の壁を越えた文化交流も盛んになって、世の中の大変化が生じる時代はすぐそこだと個人的に感じています」という。国際交流基金バンコクでも、e-book といったデジタルに関する質問が多かった。陣崎さんは、これからはそういった本の形といった環境の変化を見据えることも重要とグローバルな変化をポジティブに捉え、タイやアジアの子どもたちへ自分の世界を届けていきたいと、今後の活動を力強く語ってくれた。

東京子ども図書館（※１）

子どもの本と読書を専門とする私立の図書館。石井桃子「かつら文庫」、土屋滋子「土屋児童文庫」、松岡享子「松の実文庫」を母体に 1974 年に設立、2010 年に公益財団法人となる。http://www.tcl.or.jp/

２）渡辺鉄太さんを中心に、IBBY 大会の様子や現地の人々の反応を語っていただきました。

子どもの本を愛する人たちと触れ合う場、IBBY 世界大会とアジア・オセアニア地域大会

渡辺さんは、世界の子どもの本の関係者が集う IBBY 世界大会に第 20 回（1986 年）東京大会から参加。実行委員長として東京大会運営に携わっていた、お父様の渡辺茂男さん（絵本作家・翻訳家）のサポートを行っていたそうだ。以来、子どもの本のグローバルな世界に長年関わっている。

そんな、渡辺さんは現在オーストラリア・メルボルンにある「メルボルン子ども文庫」を主宰し、現地に駐在する日本人だけでなく、国際結婚や日本に興味のあるオーストラリアの親子を対象に日本の本の紹介。自らを「文庫のおじさん」と称し、ヒカリエの会場でも笑いを誘っていた。

渡辺さんは、「IBBY の大会では、僕は発表などをよく行っていますが、やはり日本のことを聞かれることが多いです。僕の場合、日本に住んでいないので、自分の本や文庫のことしか答えられませんが、日本への関心の高さはどの大会でも変わらないと感じています」とこれまでの活動を振り返りる。

「子どもを国でまとめることは、もうできない時代が来たと」示唆しながらも、「母語の持つアイデンティティを、子どもたちに伝えていく必要があるのではないか」とグローバル化するからこそ、自らのルーツを大切にしなければならないと感じているという。

タイの子どもの本について渡辺さんは、「タイでは、IBBY タイ支部が作った新しいコロニアル風の絵本図書館を訪問しました。絵本ばかりの図書館で、父親の『くまくん』シリーズなど、タイ語になった日本の絵本が相当数ありました。絵本は、タイで子どもの教育に欠かせないという考え方は（陣崎さんの話にもあったように）かなり浸透してきていると思います。『くまくん』シリーズは古い絵本ですが、現在タイのブックスタート（※２）で配られたり、幼稚園の図書室に置いてあったりしているらしいです」と、日本の絵本が長い時間をかけタイで受け入れられている現場か

ら、絵本の面白さをタイの人たちが理解しはじめたことについて、日本の絵本が一役買っているのではないかと述べた。

IBBY アジア・オセアニア大会について渡辺さんは、第 1 回のバリ、3 回のタイ大会の参加し、世界大会との違いは身近なアジアの絵本に対する親近感だという。日本の絵本研究の多くはこれまで英米の児童文学が中心だったが、今はアジアの本への注目も高まっている。アジアの他の国も同様で、翻訳や英語の本が多かった国でも、母語での出版が盛んになり、IBBY アジア・オセアニア大会では、これまで語られることのなかったアジアの本についての議論が行われるので興味深いそうだ。また、議論といっても学会のような堅苦しさはなく（もちろんそのような分科会もあるが）、子どもの本の作家、教育、出版、学生と、広い範囲で子どもの本に関わる人々が参加しているところも、アジアの今を知る機会になって面白いと続けた。

IBBY 世界大会は子どもの本について、アジア・オセアニア大会よりも大きなテーマが設定されるので、どうしても英米の児童文学が中心に取り扱われる傾向がある。ただどちらも、子どもの本の研究や考え方を学ぶには参考になるので、その違いを体験して欲しいそうだ。

バンコクでの IBBY アジア・オセアニア大会は、プログラムもおおらかさに親近感を覚えたというのがパネリスト 3 名の共通した感想だった。渡辺さんは会場の TK-PARK（※３）が立派なだけに、ここまでやっていいのかと思うところもあったそう。「例えば、タイの著名な作家（ソンブーン（ドゥアンゲーオ）・シンカマーナン教授（※４）の基調講演がありました。彼女は農民作家ということで、タイで伝統米を守り生産も行っていて、我々に小さな袋に入れたお米を配ってくれたんですよね。3 種類あって、もみ殻がついていて…。会場には 300 人くらいいるので、配り終わるだけで基調講演の時間が終わったんだけど、そこからお米の絵本の話が始まるの。そして誰も止めない。次の基調講演の時間もあるし、なんだこりゃ～と笑うしかない状態でした。でも、そんなおおらかさが、アジア大会の特徴ですね」と、実際に起こった大会の様子を語った。

一方で、スタッフや関係者はみんなテキパキと動き、開催中大きなトラブルや不都合はほとんどなかった。優しくて熱い人々の姿が印象的で心地よかったバンコクでの第 3 回 IBBY アジア・オセアニア大会、その他たくさんの出来事を回想しながら「タイはいいところです」と渡辺さんは話を締めくくった。

タイ訪問の感想は渡辺鉄太さんのブログ「メルボルン、薪割り日記」にも掲載

http://makiwarinikki.sblo.jp/article/180064262.html

ブックスタート（※２）

0 歳児の健診などを機会に、保護者と赤ちゃんが絵本を開く楽しい「体験」を、絵本をプレゼントすることで実現させる活動。1992 年のイギリスが始まりで、世界中に絵本を赤ちゃんに贈る活動が広がっている。

http://www.bookstart.or.jp/

TK-PARK（※３）

タイ・バンコクの中心にある大型商業施設「セントラルワールド」8 階にある図書館。2017 年に行われた第 3 回 IBBY アジア・オセアニア支部大会のメイン会場にもなった。

http://www.tkpark.or.th/

ソンブーン（ドゥアンゲーオ）・シンカマーナン教授（※４）

1939 年４月１日、タイ南部のパッタルン県生まれ。シーナカリンウィロート大学で学士号と修士号を取得し、イギリスのウェールズ図書館大学で児童文学を学ぶ。シーナカリンウィロート大学の人文学部の児童文学科開設やポータブルライブラリーの活動などの功績で。1989 年 IBBY 朝日国際児童図書普及賞を受賞。

３）濱野京子さんを中心に会場の様子や現地のタイの人々の反応を語っていただきました。

現地での交流で感じた子どもの本と、言葉を伝える難しさ

濱野さんは、まずご自身の英語が得意ではないという言葉の問題から、世界大会など海外での講演会やイベントでは、その内容を理解することに難しさを感じていると述べた。「でも、出て行かなければ、日本の外で起こっていることは分からないのです。もちろん、自分の知りたいという気持ちもあるので、機会があれば仲間を募って参加するように頑張っています。一人では無理でも仲間がいれば何とかなるのです」と語った。

2010 年にはスペインのサンチャゴ・デ・コンポステラで行われた第 32 回 IBBY 世界大会にも参加した。きっかけは、IBBY オナーリスト（※５）に選ばれたことだった。しかし当初、参加費や旅費が全額自腹と聞き「そんなお金はありません」と渡航を断念しかけたが、幸い前年に坪田譲二賞を受賞し、賞金 100 万円という幸運に恵まれたため思い切って参加したと、ユーモアを交えたご自身の体験を伝えてくれた。

今回のタイへの訪問も、タイの子どもの本の状況を実際に見聞きし、子どもたちと触れ合うことで、日本の新しい児童文学のテーマやキーワードを探しに出かけたいと思っていたところに、まはら三桃さん、陣崎草子さんといった仲間が加わり実現したという濱野さん。同じ目的を持った仲間がいれば何とかなる、そしてタイでの交流は通訳の力も大きかったが、言葉が通じなくても相手の言いたいことが、なんとなく分かるという場面も多かったそうだ。

そして、タイで現地の装丁家でグラフィックデザイナーのメイ ワイキッティポンさんと行った、コラボ企画ミニ絵本作り「バンコク通りでみつけた」の様子も伝えてくれた。これは、メイさんが予め「バナナ」、「バイクタクシー」、「マンゴライス」とタイではお馴染みの絵を描いて用意、それに濱野京子さん、まはら三桃さん、陣崎草子さんが日本語で言葉をつけ、タイ語と日本語を併記した小さな冊子を作るという企画だ。

メイさんの工房で、３枚のうち誰がどれを担当するか、じゃんけんで決め、その場のインスピレーションで書いた。

そして、3枚の絵をまとめるピタリとしたタイトルを見つけることにもこだわった。バンコクの普通に見られる風景ということで、ここは編集者の松井が提案した「バンコク通りでみつけた」までは、皆のコンセンサスを得ることが出来たが、「バンコク通りでみつけた」の後ろに『の』や『よ』というような「よびかけ言葉」を付けるかつけるか否かが問題となる。結局「見つけた」で決定したのだか、これはタイのメイさんにとっては興味深い議論だったそうだ。タイ語では、そういう微妙な変化をニュアンスとして付けることが難しいし、必要ないともメイさんは思ったそうだ。

このニュアンスの問題は、後から各言葉をタイ語に翻訳する時にも出現した。陣崎草子さんの「言葉」の翻訳がどうにもうまくいかなかったのである。それは「対象が誰なのか？　男なのか？女なのか？　好きな人の悪口を言うという状況そのものが理解できない」など、日本では日常あまり意識されない日本語の曖昧さを実感した。「特に短歌のような無駄な言葉を省き、読む人ごとの情景を描く作家の世界観が、タイ語ではなかなか伝わらなかったんです」と、濱野さんは言葉の違いついて触れた。結局この問題は、国際交流基金バンコクで通訳をしてくれた翻訳者のピヤワンサップサムルアムさん（愛称：ニンさん）の力を借り、「バンコク通りでみつけた」が帰国後の7月に完成。日本とタイの両方でチャリティーとして販売している。

IBBY オナーリスト（※5）

IBBY の各国支部が、自国で出版された児童文学、絵本、翻訳文学の作品の各分野で、世界に紹介したい子どもの本を集めたブックリスト。2年に一回開催される「IBBY 世界大会」に合わせて発行され、リスト内に選ばれた作者、画家、翻訳者が世界大会で表彰される。

http://www.ibby.org/awards-activities/awards/ibby-honour-list/

＜パート２＞

アジアの子どもたちに必要な本とは？

第二部はパネリストの渡辺さん、濱野さん、陣崎さんと司会の松井で、これまでの経験を通じた、アジアの子どもたちに必要な本、夢中にさせるような本について議論をした。

短い訪問の中で、子どもの本を作るために必要だと感じたことは、やはり子どもたちの様子や関わっている人たちを現地で知ることだと皆でうなずいた。日本の文化とタイの文化を知り、そして日本語にも堪能な通訳ニンさんなど、翻訳者との出会いが文学の言葉の壁を超える手立てのひとつで、そういう人材との出会いは貴重だ。

また、子どもに読ませたい本など、リストで上がっていても、本当に読まれているかは、現地の図書館や書店などを見て回らなければ分からない。

渡辺さんは、タイの普通の書店でかなり過激なボーイズラブが何の違和感もなく並んでいる現場を目撃。子どもにも見える場所にタイでは普通に置いてあるということに衝撃を覚えたそうだ。仏教国のタイが、そういうことは厳しいのか、緩いのか、分からないけれど、普通の感覚ではあまり見ることが出来ない本である。

最近は日本でもアジェンダ問題に関しては、比較的前向きに取り組まれるようになったが、ここまでオープンな状態ではない。同じアジアの仏教国でも、感覚差があることを体感し、今後アジアの子どもたちを夢中にさせる児童文学を考える上で、性の扱いはポイントにもなるかもしれない。

アジアの多様性に対し、子どもたちに伝えたいことを子どもの本で届けるとすれば、それを描く作家の役割りは何か？　それを考えた今回のトークセッション「子どもの本の作家がバンコクで考えた　アジアの子ども達が夢中になれる本」では、「他国の人たちが共感でききる日本の文化を探る」、「子どもの本の現場を知る」この２点を結論としてまとめることができた。

その方法のひとつとして、日本の子どもの本の作家が日本の外に飛び出し、様々な文化圏で子どもの本に携わる人や場所に行くことが挙げられた。出版社が版権取引で海外に行くことはあっても、作家が外で交流する機会はあまりないのが現状だ。その理由は様々だが、外に目を向けるという意識に深い意味があると、今回のタイ訪問体験談からうかがうことができた。

最後に、パネリストの３名から、今回のこれからの活動についての頼もしい言葉を寄せていただき１時間半のトークセッションは終了した。

＜これからの活動について一言＞

陣崎さん

「言葉の壁がテクノロジーの発展でどんどん低くなっていく時代はすぐそこ。自分の世界感をもっと自由に広げていけると思うので、今回受けた刺激はとても重要なものでした」

濱野さん

「伝わらないことは多いけれど、こちらから出向かないと何も始まらないですよね。これは、国とかアジアとかではなくどこでも同じ？　ただ、残念ながら作家の参加が多くない。お誘いすればみなさん意義を感じてくださるようなので、私の使命は、作家を誘うことです」

渡辺さん

「本好きな人の集まりは、いろんな人生のきっかけ作りにもなっていきます。子どもたちが夢中になる本を、どう提供するかといった大人の姿勢を世界と共有することが使命です」

●参加者から

１）竹内より子さんから参考資料のご紹介

竹内さんは、タイの絵本の研究・翻訳家。タイで人気の絵本『ニン』の翻訳を手掛け、今回のIBBY アジア・オセアニア大会会場でマイティブックが配布したブックリスト「日本で発行されたタイの子どもの本」の選書や、ヒカリエの会場では渡辺さんの話に出た「お米の話」など、タイの児童文学についての補足や参考資料をご紹介いただいた。

竹内さんのブログ「タイの子どもの本」　https://ameblo.jp/nangsupaap/

＜渡辺さんのお米のお話で登場した絵本の紹介＞

『たったひとつぶの　お米』

ソンブーン・シンカマーナン／作　プリーチャー・タオトーン／絵

昔々　チャイブリーに二人の友だちがいました。
しごとはおひゃくしょう
いつも　食べるにこまることなく
ちょうどよいだけのもので　暮らしていました。

田んぼのしごとのあいまには
森のものをさがしに行き
満足のゆく木々の実は
食べきれないくらいで
近所の人々にほど良い値段で売っていました。

ふたりが食べるごはんを包んで
おやつにはくだもの
山のふもとにつくと
小川のほとりで休み
心は楽しく　お昼ごはんを食べました。

おなかいっぱいで元気になって
小川を歩いて渡り、けわしい坂を登り始めたとき、
呼ぶ声を聞きました。
お米を連れて行って
お米を連れて行って
食べ終わるまで捨てないで

引き返してもどって見ると、
だれもいないけれど　聞こえてきます。
大きくはっきりした声で
食べ終わるまで捨てないで
食べ終わるまで捨てないで
たった一粒のお米

ひとりは言いました　もう行こうよ
たった一粒のお米じゃないか
もうひとりは頭をふりました。
一粒のお米　一口にもみたない
急いで食べて行こう

山をのぼり　森に入り
いいものをいそいでさがします。
たくさんとれて満足して
てんびんぼうでかついですばやくひきかえす時

晴れていた空が突然暗くなってきました。
嵐の風がうなり　大きく森中にとどろきました。
大きな動物も小さな動物も
あわてふためいてにげまどいます。
雨がはげしくふってきて
あふれた水が流れてきます。

わたってきたあの川は
水がたくさんあふれて心配がつのりました。
荷物は重く　ちょうど川の真ん中に来たときは
体力がなくなっていました。

はげしい激流の中で
うずまく水は力いっぱい引っぱってきます。
たちまちすべってしまいましたが
お米を食べた男は力が生まれてつき進みました。
水の中を泳いで無事にきしべにのぼりました。

お米を食べなかった男は力がつきて
水が体をたたき　流れが打ち過ぎるとき
気をうしないながら
お米のことを思い出しました。
森の川の中で

お米を食べた友だちは
いそいでもどって　大声でよびました。
さがしについてきた人々を集めて
すぐさま森の川について
命をすくうのに　まにあいました。

それ以来　年をとるまで二人は親友で
子どもやまごに　あの日の話をしました。
夢のように死をまぬがれたこと
たった一粒のお米で

おお　母なる五穀の神よ
小さい子どもは尊敬します。
キウヘーリーよ　（この単語の意味はよく分からない）
千金の値の母よ
子どもたちがまねくのをお聞きください。
今日もまた母の魂よ　どうぞおこしください。

※このお話をタイで聞いた時、お米を食べなかった男性は死んでしまったと結末を間違って認識してしまい、ひどい話だと勘違いをしていたことも、今回の報告会で判明した。

＜タイの子どもの本を知るために役立つ資料＞

・「こどもとしょかん 155 号秋」東京こども図書館　機関誌（2017 年 10 月発行／767 円）
　評論：タイの子どもの本の 25 年　ポンアノン・ニヨムカ・ホリカワ
・「世界の絵本の現在　報告集タイの絵本」財団法人大阪国際児童文学館（2008 年 3 月発行／2052 円）
・「日本で発行されたタイの子どもの本」（以下アドレスからダウンロード）
　http://ibbyasia2017thailand.webnode.jp/l/blog3/
・「国際子ども図書館の窓」第 10 号「タイの子どもの本事情」（以下アドレスからダウンロード）
　http://www.kodomo.go.jp/about/publications/window.html#anchor10

２）質問

IBBY 世界大会やアジア・オセアニア大会の費用について質問があった。濱野さんの前半トークの一部にもあったが、IBBY アジア大会や世界大会の参加料金などは、個人での参加を決定する場合において重要なファクターである。

大会によってかなり金額や内容に差があることや、現地通貨の為替レートによってもかなり差が出るため、平均的な金額を伝えることが難しいといった事情はあるが、これまでの参加費をサンプルとしてまとめて掲示しておくことが必要ではないか？　これは IBBY の日本窓口である日本国際児童図書評議会（JBBY）へ提案したい。

３）ミニ絵本「バンコク通りでみつけた」

会場でも紹介と販売を行ったＡ４サイズの紙を折って作る冊子。売上は タイで子どもの読書環境作りに励む「マレットファン」、「アークどこでも本読みたい」の２団体に寄付を予定。2017 年年末でいったん売上を集計するが、引き続き１部 300 円 で販売。

＜お申し込みはこちらから＞

http://ibbyasia2017thailand.webnode.jp/

●子どもの教育や読書活動を支援する２団体

マレットファン　http://maletfan.org/jp/

教育支援をおこなうタイ国認定の公益法人（NGO）。現場の「おとな」が今、求めるテーマに応じた研修会の実施、格差社会の中で孤立しがちな「おとな」同士の交流の場づくりをする団体。ムアイ、ギップ、松尾久美の３人がこれまでのＮＧＯ活動を経て 2013 年１月に設立し活動を開始。「こども」にかかわる「おとな」の支援をしている。

●アークどこでも本読みたい　http://www.alwaysreadingcaravan.org/japanese/index.php

アークどこでも本読み隊(アーク)はアークは 2010 年 1 月に堀内佳美によって設立され、タイの中心部にあるスパンブリー県を拠点に活動している非営利、非政府、非宗教の団体。移動図書館をはじめとする様々な活動を通して、障害の有無に関わらず、タイの農村部にいる子供たちに、本を読んだり学んだりすることの喜びを届けている。

＜「バンコク通りでみつけた」協力者紹介＞

●イラスト&デザイン

May Waikittipong（メイ ワイキッティポン）

イラストレーター／グラフィックデザイナーとして本の装丁も数多く手掛ける。子どもを描いた絵が得意分野で、レタープレス印刷機を利用した作品をパートナーと共同所有する工房「pianissimo press」で制作および販売をしている。

https://www.facebook.com/pianissimopress/

●翻訳

Piyawan Sapsamroum（ピヤワン サップサムルアム）

日泰通訳、翻訳者。バンコク国際交流基金で 2017 年 5 月 9 日に開催した濱野京子、まはら三桃、陣崎草子、渡辺鉄太の「児童文学という仕事」の通訳を務める。「バンコク通りで見つけた」の趣旨に賛同し、日本の児童文学作家がメイさんの絵につけたストーリーのタイ語翻訳に協力。

●コーディネーター

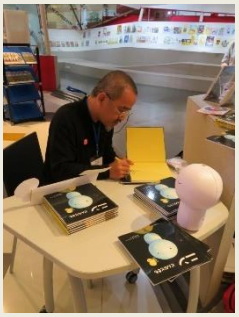
長尾弥生（ながお やよい）

ライター。中学時代をフランスで過ごし、上智大学卒業後､化粧品メーカーで営業、広報を担当。退職後はフリーライターとして活躍。趣味は旅と三味線。著書に『バリ島小さな村物語』（JTB パブリッシング）や『フェアトレードの時代』（コープ出版）。ベトナム駐在時に友人と制作したフリーペーパー「サイゴン ノオト」や「サイアム　ノオト」の制作をタイで続けている。
共著に『極楽 アジアの暮らし方　マレーシア／インドネシア・バリ島』（山と渓谷社）など。
ウェブマガジン「サイアムノオト＋２」https://sanfrannote.com/

＜おまけ＞

IBBY アジア・オセアニア大会会場の TK-PARK に、ご来場いただいたタイの人気絵本作家チーワン・ウィサーサ先生。サイン会ではチーワン先生の『ニン』の日本語版が人気でした！

『ニン どんなときも』
チーワン・ウィサーサ（作） 竹内 より子 (翻訳)
マイティブック（発行）1600 円



<アルバム>

TK－PARK

国際交流基金バンコク

メイさんワークショップ

サロン・デ・オデュタン

マレットファンの幼稚園

●次回：2018 年に向け　担当の松井紀美子、全力で企画中！

この講座は、アカデミックな議論を目的としたものではありません。普段の生活の中で子どもの本について感じることや、知りたいことなどを楽しく語り合う交流の場です。子どもの本とテーマに興味のある方なら誰でも参加できます。また、取り扱って欲しいテーマなど、講座へのお問い合わせは下記メールアドレスまでお願いします。
お問い合わせ●　info@mightybook.net （件名に「読むの木講座質問」とご記入下さい）

株式会社マイティブック　東京都杉並区高円寺北 2-1-17 深澤 MK ビル 201
TEL:03-5327-8109 FAX:03-5327-8119
info@mightybook.net　www.mightybook.net　www.bookbird.jp